



ピノコパパのエッ  
セイ集から



伊勢神宮

pinokopapa

## 伊勢神宮へ

神宮 に行きました。

名古屋から快速電車 みえ に乗り、伊勢市に向かいました。快速でも1時間40分余りかかります。神宮で特別な催しがあるわけではないからでしょうか、電車もすいておりました。しかし車内に中国語、ひげのはえたイタリヤ語が聞こえます。パワースポットを求めているのか、若い女の子も見かけます。見てる間に缶ビールが一本ずつ空き、窓の下に空き缶が並びました。今の子はお酒に強いんですね、平気です。その車窓を家並みと時折満開の桜が飛んで行きます。私達はついそれに目を奪われました。明日の最低予想気温が  $-2^{\circ}\text{C}$  だということに、満開の花の花影が掠めてゆきました。

伊勢市駅で降り、方角も確かめず歩き出します。寒さに身をよじりながら下宮を目指して・・・いけるかどうか解らずとも田舎ものは歩きます。花冷えのビル街を抜けると、やたら屋台とテントがありました。なにかバザーのようなことをやっていたのですが、見物人より催し物をやっている人のほうが多いのです。しかしともかく外宮を目指して行きます。大きくて飾り気のない鳥居が橋の前に立っておりました。間違っただけで、橋を渡ると地図通りに外宮がありました。そしてここを「げぐう」と思っていたのは大間違いで「げくう」が本当だと知りました。さらに内宮は「ないくう」でありました。それほど何も知らないのに「お伊勢参り」を突然思い立ったのは、ただ人気の神宮会館の予約が取れた、それだけの理由からでした。しかし夕食は神宮会館では取れず、どこかで済ませてくるようにといわれており、それらしいところを求めてうろつくことになりました。しかし、ままなりません。知らない土地で食堂を求めてうろろろするのは、なんともみじめな思いをいたしました。

早々に外宮を出、教えられたバスに順調に乗り、内宮とおかげ横丁に向かいました。もう5時近くで、土産物屋も店を閉めかけておりました。おかげ横丁の入り口付近で見かけた食堂で、店を仕舞いそうになるのに追いかけて夕食を済ませ、翌朝の朝食代わりのものを買込み、神宮会館への道で御木本真珠店に通りました。

御木本の二階の喫茶部でケーキセットを口に押し込みながら、なんともみじめなお伊勢参りだと思いました。しかし、金毘羅参りと並んで、伊勢参りは江戸庶民の一大観光旅行でありました。この二つは、信心の旅でしたから江戸時代でも、大変寛容に扱われていたのです。ですから、いわば一生のうち一度はしてみたい大娯楽でもありました。しかし、伊勢の地のどこかにいさなぎのみことが、後を追ってくる いざなみのみとこ

から逃げようと、岩を投げて塞いだ黄泉の国の入り口があるはずなんです。なんとも不気味な話ですが、そんなこともおもいだしました。そして、その岩の後ろに仁王立ちになり、いざなみのみことは、あなたの国の人を千人殺してやると恨み言を言い放ちます。それに対して、みざなぎのみことは、それならわたしは千五百人を生み、この国を栄えさせようと言い返します。その岩がこの紀伊半島にはあるはずなんです。そして、この黄泉の国伝説が熊野信仰と結びついているのです。熊野信仰とは、人は死んで若々しくよみがえるという信仰です。熊野詣では、かつて上は天皇から庶民に至るまで現世来世の幸福を願い、精進潔斎して参られてきました。それは黄泉の国へ行き、生まれ変わって若返るという熊野信仰の信仰原理からでした。この黄泉の国の入り口は、出雲にもあります。おおくにぬしのみことは国譲りをしたあと、黄泉の国の支配者になりました。そして京都にもあります。こんなあまり知られておらず、また今は表立って語られない言い伝えのある信仰の場が、伊勢熊野の地です。不吉というわけではありません、伊勢熊野は黄泉の国で、ここへ来て生まれ変わって若返るという信仰を私達が教えられていないだけの事です。伊勢熊野は木の国、紀伊の国、それゆえ黄泉の国であり、のちに浄土とおもわれることにもなりました。

神宮と呼びました。昨夜会館のほうから案内があり、翌朝神宮をガイドしてくれることになっていました。翌朝、6時30分集合で、神宮会館のロビーに集まり、ガイドさんに連れられて内宮へ参拝に行きます。これが神宮会館の人気の秘密です。ここから歩いて直ぐでしたが、花冷えどころではない、マイナス2度の寒さでした。そんな寒さの中、手袋までして内宮の入り口で最初に聞いた説明が、この神社は神宮が正式名称で、伊勢神宮は通称であるということでした。知りませんでした。神宮は皇室の祖先神の御霊を祭ってあるところを言うのですが、明治神宮 香取神宮などとは違い、お伊勢さんの正式名称は なんの冠もなしの 神宮 なんです、と聞かされ、一緒に行っていた人たちも同様にびっくりしていました。

内宮への初めての鳥居を入るとき、説明をしてくれるガイドの若い女性が綺麗に足をそろえ、お辞儀しました。髪は後ろで束ね、清潔に薄化粧し、黒いコートに黒いストッキングとローシューズで、たたずまいはまるで黒の衣装の巫女さんです。私達引率されるものも、あわてて威儀を正して頭を下げます。五十鈴川の橋を渡り、時々立ち止まって説明を受け、次へ向かいます。見事な桜がありました。



冷たい朝の、気品に満ちた桜でした。

次々と案内され、正宮では感謝するところであるから賽銭箱がありませんと聞かされ、それでも白い布の上に賽銭を投げて二礼二拍手してなにやら願い事をしてしまいます。気候の神様、神様の食事を作るところ、五十鈴川の水をくむところ、神馬の小屋、さらに社も鳥居もない神社と回り、そのときはそれぞれの社の謂れも覚えていたのですが、後に残ったのは寒かったことだけでした。しかし五十鈴川の鳥居を触ってみろといわれ、サンドペーパーとか機械で削ってなくて、人の手で槍鉋という刃物を使って削った木の肌の滑らかさには驚きました。正に真円の柱が匠のわざで削りだされておりました。またそのときは気付かなかったのですが、どの社殿も何の彩色もされておらず、参る人を圧倒するような威容も誇らず、清楚なたたずまいでした。拍子抜けするほど簡素です。小さくて、可愛いといえれば恐れ多いかもしれませんが。しかし日本第一の神社でありながら、どこにも武張った所のない、森と木の中にそっと在り続けてきた神社であることに、後から思い当たりました。

来年は式年遷宮の年です。神宮は、伊勢熊野の言い伝えとか後の世の信仰理念とはかけ離れたところに立つ、あの「今の人には忘れられた」と評される日本人の無垢の姿があるように思えました。今は、神に祈るとは自分の願い事をかなえてもらおうという欲を神におしつけることになってしまっているのですが、自然信仰などと言いでいってしまっても終わりに出来ない、感謝と 真の祈りがここにはあると思いました。そして今の日本人だってそれを忘れてはいない、体の中にそれを持ち続けていると思いました。

寒い中、私達の横を何十人かの白袴をはいた人たちが無言で歩いて行きました。ガイドさんが横によけてかしらを垂れ、見送ります。神宮の神官の人たちでありました。凜

と張り詰めた寒さでした。

## 伊勢神宮 二

伊勢に向かったとき、おぼろげであやふやな記憶があって、またそれをちょっと期待するところがありました。。平氏の歴史を見ることができないのではないかと考えていたのです。津は忠盛塚のある、平忠盛ゆかりの地です。

平氏と平家是一緒ではありません。京都六波羅の忠盛ゆかりの平氏を特に平家と言い、区別しているようです。しかし平家、平氏の事跡は殆ど現存しておりません。さすがに神社仏閣は恐れたのか、それらには手を出してはいませんので巖島神社とかは残っていますが、あとは源氏によって徹底的に破壊し尽くされました。悪逆非道の人とされた清盛は、池禅尼の命乞いに負けて、頼朝を助命したほどの人の良さでしたのに。ですから、平家の事は、影の主役は源氏である、平家物語でしかよくわかりません。歴史は正に勝者によって書かれるものということの典型でしょう。そうしたことから、清盛は三国志に言う曹操になってしまいました。しかし本当は、清盛は実効支配者としての武家政権を作る時代の転換点の先駆けとなった人です。もっと正当に評価されるべきと思います、判官鼻根でなく。

伊勢と紀伊半島は華窟神社、熊野三山、金峯山寺、熊野古道と、謎に満ちたところ です。ところが、これらは聖武天皇が東大寺大仏を建立し、仏教を国教としたあたりからないがしろにされはじめました。仏教と違って、これといった教義ももたず、社殿も、仰々しいご神体もなく、ただ自然を畏れ敬い祈ることだけの信仰ですから。あの時代から日本人って舶来ものが高級に見えてたのでしょうか。人間にだけ興味のある仏教なんかより、ずうっとやさしさに満ちた信仰だと思うのですが。

私の神道に関する知識は、実は司馬遼太郎氏の この国のかたち というエッセイ からです。 この国のかたち の 五巻 の 神道 1～ 七 の文章をかつて読んで、忘れていました。それをひょっと思い出し、見返してみると実に正確でかつ深い

洞察の文章でした。さすがに 司馬史学。

神道に、教祖も教義もない。

畏れを覚えればすぐ、そのまわりを清め、にだりに足を踏み入れてけがさぬようにした。これが神道だった。

司馬史学はこう語ります。そして

社殿、拝殿は必要とせず、敬虔な心で祈り、神から現世の利をねだるという現是利益の卑しさはなかった。

と語り、これを古神道と呼びます。ところがこの国に仏教が入り、山伏が出現し、政治が信仰を政争の具として仏教国家を宣命し、のちには明治政府が国家神道への変容を強いたりしましたが、それらの重圧が取り除かれると、この自然な信仰はまた元に戻って生き残ってきました。日本人が一見無節操な無神論者に見えるのも、もともと自然な形でのこんな古神道のあり方を持っているからかも知れません。

お伊勢参りでいいじゃありませんか。明治期の国家神道の暗い記憶は忘れて、神宮に参ってみましょう。自分の体の中から、自然と祈りの心が湧いてくる気がするはずです。

伊勢 三

記紀の中に、あまてらすおおみかみ すさのお と、余多ある神々の中で一番のヒーローは やまとたけるのみこと でしょう。このみことは東奔西走して従わない神々を平らげてきました。しかし、その遠征の旅から帰っても、何故か都に入れてもらえず、病を得て亡くなってしまいます。そして白鳥となって飛び立ち、河内とか兵庫の方へとんでゆくのですが、どこへ舞い降りたかは書かれていなかったと思います。しかし、その白鳥が舞い降りたのはここだという伝説が香川県の東かがわ市にあり、そこに白鳥

神社が祭られております。四国は都から遠い国だったのでしょう。崇徳上皇も流されてきておりますし、やまとたけるのみこと も、なくなっただけで都には入れてもらえず、遠くこの地にお鎮まりになってもらっているのです。

ついでのことですが、讃岐はこの他に静御前の剃髪塚が八十八ヶ所の一つ、長尾寺にあります。あの平家物語のスーパーヒーロー義経の思い人静御前は、義経が九州へ落ち延びようとして失敗し、ともに吉野へ向かいます。しかし、静はそれ以上の供を許されず、きょうにかえることとなります。しかし、その帰る途中で、頼朝側に捕らえられます。そして鎌倉で静が舞い歌ったのが

しづやしづ しづのをだまき くり返し 昔を今に なすよしもな

吉野山 峰の白雪 ふみわけて 入りにし人の 跡ぞ恋しき

でありました。

その後母の磯禅師と、母親の故郷の讃岐に帰り、四国を巡礼をして巡っていたそうですが、その途で禅師が亡くなり、静は長尾寺で髪をおろして仏門に入ります。その静御前の剃髪塚と磯の禅師のお墓が長尾寺に残っております。もっとも静御前のお墓は淡路島にもあるそうですから、真贋のほどは解りません。新潟、東北、河内その他悲恋の伝説は、この地に静のお墓があるといわせるようです。

この静御前、鎌倉に連れられた時、義経の子供を身ごもっておりました。そこで、生まれてくる子が女の子なら見逃そう、男の子なら殺せと頼朝は命じたそうです。それを聞いた政子は、懸命に命乞いをしたそうで、女将軍といわれた政子のあまり知られていない面が垣間見えます。

しかし、果たして生まれた子は男の子で、必死に庇う静御前の憐れさに鎌倉からきた侍も一度は立ち帰りますが、頼朝の厳命から赤子を取り上げにきます。そして、あらがうならば親子ともども殺してしまうぞと言われ、静御前から子供を取り上げたのは母の磯禅師でありました。取り上げられた子供は由比ガ浜に沈められ、殺されました。清盛に助けられた頼朝が、義経の子を殺す、そんなことが源氏のこのあとの歴史をつくった

のでしょう。その後、解き放たれて讃岐に帰った静御前と磯禅師親子のそれぞれの悲しみと憎しみはどうだったかと思ってしまいます。それでも長尾寺には今も親子の墓が並んで立っております。

伊勢から、話が膨らみすぎました。